

海・川・湖 その世界とのふれあい

# マリンズ

MARINE SNOW

No. 8

1988. 7. 20

5周年記念号



● 目次

5周年にあたって…………… 1	5年間の出会い、そして …… 7
5年間あの時この時…………… 2	トピックス…………… 8
青森県で確認された 鱈脚類…………… 5	催し物…………… 9
青森県で確認された 鯨 類…………… 6	浅虫の海の生物たち(8)…………… 10
	日誌抄録…………… 10
	動物紳士録…………… 11

青森県営浅虫水族館

# 開館5周年目にあたって

館長 平川 和 良



マリンスノーを発刊して今回が8号を迎えることになり、読者のみなさんに浅虫水族館が調査したこと、又、体験したことを飼育に携わる専門の方々がそれぞれの分野から発表し又は、報告をしましたが、それなりに反響があり、情報の交換

とか、より良いアドバイス、又、さらに探求されるものもありまして、生きた動物を扱う機関として嬉しい限りであり、マリンスノーを発刊してよかったという実感と、続刊しなければならないという責任感を持つにいたったのではないかと思います。

私達の環境は、自然河川からコンクリート河川・海はコンクリート護岸となり、その箇所を災害から護るということでは、目的を達していますが、反面、川や海に身近かに接する機会が年々狭められ勢いそこに棲息する生物と我々との触れ合いの場も年々少なくなっております。そのコミュニケーションの場として水族館がその役割りの一部を果たす必要があるのではないのでしょうか。

又、私共の地域で見掛けることのできない世界各地に棲息する生物を機会を促えて紹介すると共に地域のみなさんが、身近かに自分の目で確め満足していただくことが水族館の使命であると思

ます。

特に本年度は、新たな交流と発展、北の飛躍をめざして、青函博覧会が7月9日から9月18日まで地元青森市で開催されることになり、しかも世界観光として名高い「ねぶた祭り」を中心に会期が設定されましたので、県内外から多数の観光客が、青森市を訪れることが予想されます。

当地浅虫温泉は、博覧会々場からバスで35分位の近い所にあり、特に博覧会期間中は、高速のシャトル船を運行して浅虫までの時間を短縮し、併せて陸奥湾の景勝を楽しみながら浅虫までおいで下さるよう便宜を図っております。

本年度は、浅虫水族館もオープン以来5周年を迎えることになったので、博覧会と迎合しいろいろなイベントを企画し、特に東南アジア等に棲息し、身体が柔軟で早がわりの名人とも言われている「コツメカワウソ」の新規展示、又、北にふさわしいスルメイカ等も紹介し内容を充実する考えです。

さらに迷路を組入れた「クイズハウス」を新設し、いくつかのチェックポイントを経て動物のクイズに挑戦していただき入館者に楽しんでいただけるよう工夫し6月末までに準備を終え、お客様をお迎えできるよう目下進めているところであります。

マリンスノーの読者におかれましても是非この機会に当水族館の新たな部分を見学していただければ幸いに存じます。

## 63年度催事予定

- 海の宝石、貝展……………4月下旬～9月中旬
- ドキドキふれあいタイム……………10月の各休日
- 第4回浅虫水族館まつり……………10月8・9日
- 第3回浅虫水族館図画展……………8月25日  
……………～9月25日(募集)  
……………10月15日  
……………～11月30日(展示)
- スルメイカ・ヤリイカの展示  
……………7月中旬～12月下旬
- コツメカワウソの展示……………7月23日より
- 津軽錦の展示……………4月29日～9月下旬
- 魚の国のオリンピック……………9月上旬～10月下旬
- 開館5周年記念(7月23日)  
・ 一日館長・県魚ヒラメの展示開始・カワウソの初公開(除幕)
- クイズハウス開設(7月1日)
- 遊びの広場コーナー開設(屋上開放)
- 開館以来200万人入館者達成記念(8月末頃予定)

# 5年間あの時、この時

## 思い出のアルバム



太地でのイルカの訓練

先輩水族館、県内外水産関係機関の協力でさまざまな魚達も続々と搬入された。

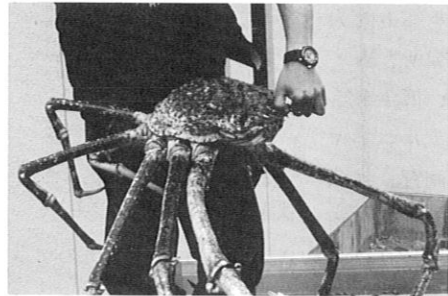
開館に向けて一年前より和歌山県太地町にてバンドウイルカの訓練、一足早く完成した車庫を使つてのアシカ達の訓練が行われた。



完成したアシカ舎へ移動



ヘルメット姿での魚類搬入



鴨川シーワールドよりタカアシガニの搬入

昭和58年7月23日、常陸宮両殿下をお迎えしての開館式が盛大に行われた。



華子さまのテープカット

# 思い出のアルバム



生物教室で顕微鏡を使つての鱗の観察

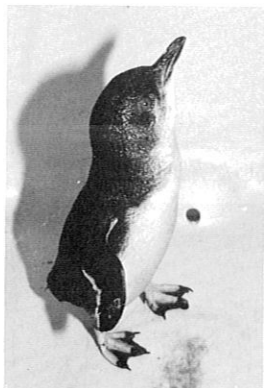
5月・階上海岸にてコビトペンギンを1羽保護

・北大臼尻実験

所よりネズミイルカ搬入。(60年4月にも同所より3頭搬入し現在も生存している。)

10月・ガルベトン大学海洋研究所、W・T・yong 博士来館、「カリフォルニアヤリイカの飼育」講演

12月・大間沖にて古川氏が一本釣りにて釣り上げた体長約1mのアブラボウス受贈。



保護されたコビトペンギン



アブラボウス

60年

4月・春の特別展「ふるさとの淡水生物たち」開催。これより年数回の特別展が行われる。

5月・Guelph 大学、ガスキン博士ネズミイルカ調査のため来館。プロポーシオンなどを測定。



ネズミイルカの測定

58年

12月・浅虫中学校の生徒40名の参加で、生物教室を開催。魚の鱗の観察や、水族館の裏方を見学。

59年

1月・マダラの産卵をビデオに収録。……59年

4月・日本動物園水族館協会に正式加入。

・4月～5月にかけて、クラカケアザラシの幼獣を県内を含め6頭保護。



クラカケアザラシの幼獣



ネズミイルカの搬入



春の特別展

ふるさとの淡水生物たち

…60年



ニホシザリガニ

## 想い出のアルバム



100万人目のお客様にプレゼントが贈られた

7月・スルメイカの特別展示を開始。以後毎年特別展示され61年11月には82日という飼育最長記録を樹立。

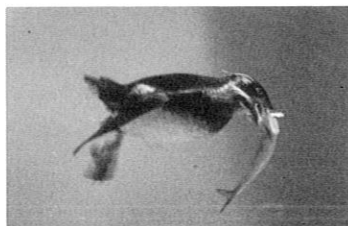


人気を呼んだスルメイカの展示

11月・ホタテ・サケ祭り開催。以後「水産まつり」として毎年好評を博している。

### 61年

3月・イルカ類の県内聞き取り調査を行う。結果は本誌No.4、第13回日動水海獣部会にて発表。



ウトウの捕食シーン



トンネル水槽を御観覧の礼宮様

7月・中国大連より自然博物館視察団一行来館、  
8月・礼宮様来館、学習院大学、自然文化研究会のご学友一行25名と共に御来県。

6月・開館以来入館者100万人の入館者を迎える。

・ブラジルサンタカタリーナ州知事来館。青森市と姉妹都市であるサンタカタリーナ州からは開館に向け、入手困難なピラルクーやピラニアを寄贈していただいた。



熱心に視察するサンタカタリーナ州知事

7月・皇太子殿下、同妃殿下来館。第21回献血運動推進全国大会に御来県された。



タッチコーナーで浅虫小学校1年生と。

6月・北海道大学と共同でウトウの飼育研究を始める。7月より一般公開。

10月・開館以来150万人の入館者を迎える。

11月・和歌山県太地町よりバンドウイルカ3頭陸送。輸送時間24時間で無事搬入。

・むつ市浜奥内にて八重山群島黒島にて放流されたアカウミガメを保護。62年9月ふるさとの黒島へ帰す。

62年5月・青森市小橋よりカマイルカ搬入。…62年



カマイルカの搬入

# 青森県で確認された鰭脚類

阿部 恵一

浅虫水族館のオープンにともない、県内各地から変わった生物に関する情報が数多く寄せられるようになっていきました。その中でも鰭脚類に関する情報もかなり頻繁に寄せられ、当館で保護、飼育することもありました。鰭脚類というのはアシカやアザラシの仲間のことで、脚（手や足）がヒレ状になった海の動物です。昭和20年頃までは日本にもアシカ（ニホンアシカ）が生息していたという話もありますが、現在ではまったく見ることができません。

鰭脚類には、アシカ科、アザラシ科、セイウチ科の3科がありますが、水族館がオープンして以来5年間にアシカ科2種、アザラシ科3種の計2科5種類の鰭脚類が青森県沿岸で発見されたり、保護されています。

アシカ科2種のうち、ほとんどの場合はオットセイで、これまで実際に確認しただけでも9例あり、電話で連絡を受けて形態や大きさなどからオ



一時、保護したオットセイ

ットセイと推測された例も数多くありました。オットセイは以前、その良質の毛皮を目的に乱獲され、

著しく減少したため、今では国際条約によりきびしく保護されており、特別の許可でもないかぎり飼育することさえ禁じられています。当館への連絡は、ほとんどの場合アザラシが網に入ったとの連絡で、行ってみるとオットセイだったということが多く、性別や推定年齢、傷の有無などを調べた後海へ返してやっていますが、状態の悪い個体については一時保護し、回復させてから、国内のオットセイ保護施設などに送ることもあります。

アシカ科のもう1種はトドで、実際に見ることはできませんでしたが、テレビのニュースで見た

のは間違いなくトドでした。

アザラシ科では、クラカケアザラシ、ゴマフアザラシ、ワモンアザラシの3種が確認されました。クラカケアザラシは、水族館オープンの翌年、昭和59年4月から5月にかけて4頭、昭和60年4月



クラカケアザラシ

に3頭の合計7頭保護され、いずれも全身真白の産毛でおおわれた幼獣でした。ゴマフアザ

ラシは、昭和60年に1頭、61年と62年には2頭ずつ、63年には3頭の合計8頭が保護され、それらはすべて、傷

ついた若令獣や生後間もない幼獣で、県内の太平洋岸で網に入ったり、海岸に上っていたものです。



ゴマフアザラシ

ワモンアザラシは昭和59年、60年の共に12月に1頭ずつ、計2頭が保護されており、いずれも手や足に大けがをしていました。こうしてみると、県内で発見される鰭脚類は遊泳力の弱い幼獣や、傷ついた個体が海流に押し流され、北へ戻ることができずにやってくる人が多いようです。



ワモンアザラシ

# 青森県で確認された鯨類

古賀 隆 弘

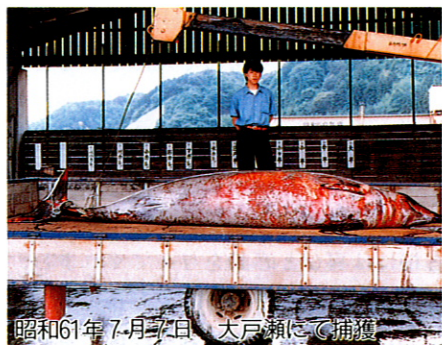
この5年間に、当館で直接、間接的に確認した鯨類は、4科5種になります。

直接確認できるものは、当館の職員がプロポーシオンを測定し、写真をとり、飼育可能なものについては、水族館まで輸送して飼育を行いました。間接的には水産試験場や改良普及所からの写真を添えた情報や、新聞社からの情報提供により、種類を確認しました。

## 1. ナガスクジラ科 コイワシクジラ

通称ミンクジラと呼ばれていますが、3例の確認があり、1例は今年の1月末に津軽海峡沿いの今別町で、体長2.7m、体重150kgのほとんど出産してまもないと思われる個体が浜に打ち上げられました。また、他の2例は今年の5月に日本海側の深浦町の大型定置網に入網したものでした。

## 2. アカボウクジラ科 アカボウクジラ



昭和61年7月に日本海側の大戸瀬の定置網で1個体が捕獲されました。体長は4.1mでした。

## 3. マイルカ科 カマイルカ

昭和59年6月に深浦町の魚市場に3頭が生きたまま上げられましたが、市場の方が、かわいそうだということで、港にまた放してやったそうです。そのうちの1頭は、すぐに港から出ていったのですが、残りの2頭がしばらく港の中を泳ぎ回っていました。また、昭和62年5月に青森市小橋で、1頭が定置網に入網し、水族館に搬入されました。現在、元気にショーの訓練を行っています。

## 4. ネズミイルカ科 ネズミイルカ

最も確認例が多く、8例にのぼります。そのうち水族館に搬入して飼育を行ったのは、3例です。

現在も2頭を飼育していますが、この個体は北海道から輸送してきたもので、この確認例からは除外しています。ネズミイルカを初めて飼育したのは、開館前の昭和58年4月で、ショープールも完成していないなかを、工事の方をお願いして、まだ未完成のホールディングプールで9日間飼育を行いました。初めて見た時「これがネズミイルカか！名前通りネズミに似た顔をしているなあ」と思ったものでした。また昭和61年4月には、青森市の卸売市場から連絡を受けて、受け取りに行ったこともありました。確認した場所は、陸奥湾内の青森市、平館、むつ市、川内と、津軽海峡沿いの大畑、むつ市関根浜の6ヶ所です。

## 5. ネズミイルカ科 イシイルカ

イシイルカの中のイシイルカ型は5例、リクゼンイルカ型は1例確認しています。イシイルカ型は、1～5月にむつ市、むつ横浜、大畑で確認しています。



イシイルカ (リクゼンイルカ型)  
昭和62年7月7日 三沢市天ヶ森にて

今年3月にむつ市で確認された個体は大湊の海上自衛隊大湊造船所のドックに迷い込んだもので、新聞社から連絡を受けた時は、もう取り上げて海に戻した後でした。その日の夕方、テレビニュースで見た時は、「この種類のイルカをこんなに良い状態で捕獲することは、二度とないのではないか」と思うほどでした。また、むつ横浜の浜辺に打ち上げられた個体は、ドライブインの方から連絡を受けた時、「シャチのこどもが上がった」と言われ、驚いてしまいました。リクゼンイルカ型は、昭和62年7月に三沢市の浜に打ち上げられた1個体です。

まだまだ確認の例数が少なく、まとめるほどのこともない数ですが、開館5周年ということでもあり、今回このような形式でまとめてみました。これからも、たくさんの情報を寄せていただきたく、皆様のご協力をお願い申し上げます。

## 5年間の出会い、そして

神 正 人

水量10トンの大きな水槽の上に立ち、手に持った懐中電灯の光をそのまっ暗な水面に向けると、水槽の隅にわずか3〜4センチほどの小さな金魚が3尾おびえたように泳いでいる。そして反対側の隅にも1尾。残りの1尾はどこに？暗く広い水槽の中をくまなく照らし、ようやく最後の1尾を見つけ出すと、「よし、大丈夫だな」

何の事かといいますと、実はこれ、当浅虫水族館が開館する前の昭和58年5月頃の私たち魚類担当者の日課だったのです。魚を展示するための水槽は完成したものの、その水槽の壁からコンクリートのアクやペイントの溶剤が溶け出していないかをチェックするために、最終的な展示生物を入れる前の段階として、まずその水槽に真水を張り、そして小さな金魚を各水槽に5尾ずつ放して毎日その金魚が無事かどうかを確認して歩いていたのです。館内はまだ工事中の所が多く、電気も一部にしか通っていなかったため、私たちは頭にヘルメットをかぶり、手には懐中電灯を持ちながらの作業でした。

やがて、水槽まわりはOKという事になり、私たちは文字通り、東奔西走しての魚の収集、そして集められた魚たちの餌付け、時には深夜に水槽の前に座りこんで、その水槽の中に入れる、たったひとつの石の置き場所さえ、ああでもない、こうでもないと検討した事もありました。

あれから早いもので、ちょうどまる5年が過ぎようとしています。この5年間には、南極展、シーラカンス展、そして深海魚展など各種の特別展を開催したり、スルメイカやサケビクニンなど新しい生物の飼育展示、両生類や水生昆虫などの展示コーナーを新設するなど、いろいろな事を経験しました。また、私たち魚類担当者の良き指導者であった、直江、桜井両氏の転出もありました。しかし、今この5年間を振り返ってみた時に、最も印象に残っている事といえば、なんとといっても私たちが飼育した動物たちの姿です。わずか5年ほどの短い間でも、私たちはさまざまな動物たち

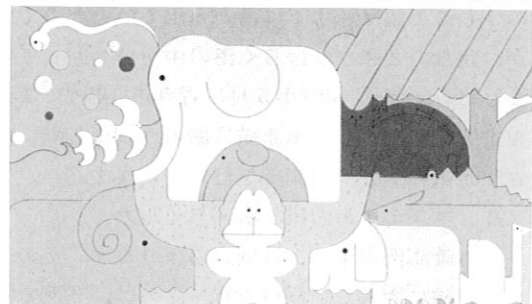
と出会い、そして同時に、たくさん動物たちの死を見つめてきました。

水族館を訪れるお客様からよく尋ねられる質問のひとつに、「水族館にいて、何が一番大変ですか？」というのがあります。その時にはきまって「魚の病気です」と私は答えます。今でこそ軽い症状ならば、ある程度の事は出来るようになりましたが、それでも1年の間には、何百か、あるいはそれ以上の数の動物たちが、私たちの治療の甲斐もなく死んでいきます。

長く飼われていて、いつも水槽の中を元気に泳ぎ回っていた魚でも、ある日突然エサを食べなくなり、変だなど思っていると、やがて水面を力なく漂うようになってたり、また、水槽の底にじっとして動かなくなったり。体は元気な時の輝きがなく、黒ずんできたり、時には体の一部が出血するなど。そしてある朝、いかにも相当苦しんだかのように、口やエラを大きく開け、体はくの字に曲がって水底に沈んでいたり、またあるものは誰もいない真夜中にひっそりと息を引き取ったのであろうか、手で触れてみて初めて死んでいると判るような、静かな死に方をしたものなど……。

しかし、彼らの死も決して無駄だったとは思いません。死んでいった彼らは、私たち飼育担当者に貴重なたくさんの事を教えてくれました。また、水族館のお客様には喜びと感動を与えてくれました。できるだけ多くの魚たちに少しでも長生きしてもらえるよう、この5年間の経験を今後に生かしていきたいと思っております。最後に、開館5周年を迎えるにあたって、今年の秋には水族館の裏山に、これまでに死んでいった動物たちの冥福を祈って、動物慰霊碑を建てる予定でいます。

この絵の中に、何種類の動物がいるでしょうか？



(浅虫水族館クイズハウスより)



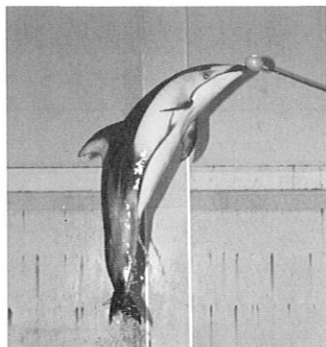
## トピックス

### カマイルカショー参加

昨年5月30日、青森市小橋より搬入されたカマイルカは、9月頃にはショーに参加できるよう、現在すでに太地町より搬入されたバンドウイルカと一諸に、トレーニングプールで、毎日一生懸命訓練に励んでいます。カマイルカは、バンドウイルカに比べて、落ち着きを欠き、警戒心が強く敏感に反応するため、ボールや輪などの小道具に慣れるのに長い時間がかかりました。しかし慣れるにしたがい、他のイルカの訓練を邪魔したり、餌を横取りしたり、プールを泳ぎ回るわんぱくぶりを発揮しています。

その後、訓練は順調に進み、ジャンプ類を中心に、ハードル、ハイジャンプ、輪くぐりと次々と種目をマスターしています。

ショーでは、バンドウイルカのようなダイナミックさには、やや欠けますが、体が小さい分、切れの良いスピーディーな動きで、イルカショーの人気者になれるのではないかと期待しています。  
(工藤秀仁)



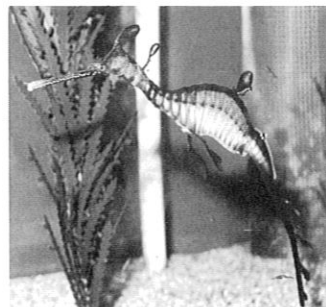
### オーストラリアからの珍客

ゴールデンウィークの直前に、オーストラリアから3尾のウィーディーシードラゴンが、当館にやってきました。“Weedy sea dragon”直訳すると「雑草のはえた海の龍」ということになりま。まさに名前どおりの姿をした、れっきとした“魚”です。

シードラゴンはタツノオトシゴの仲間、オーストラリア南部の海藻の繁った冷たい海にすんでおり、小型のエビ類やアミ類を主食としています。成長すると大きさはなんと45cmにもなるというこ

とです。大きさの割にはデリケートな魚で、飼育するのも水温を15～16℃に保ち、常に良い水質を保つように気をつけ、またマジックミラーで魚からは人が見えないようにしています。現地でも滅多に見られない珍しい魚だということですから、是非一度その姿を実際に御覧下さい。

(杉本 匡)



### ウトウの保護

4月25日、水族館から車で5分程の海岸で海鳥ウトウが保護されました。湾内の沖合ではよく見かけると、漁師さんから聞いていますが、岸に寄ってくる事はこれまでほとんどありませんでした。水族館に搬入してよく見ると、腹側が重油で真黒です。これでは飛ぶことはもちろん、海に浮くこともできそうにありません。必死で海岸までたどり着いたらしく、餌を与えてみると、すごい勢いでパクパク摂餌します。これは助かるかも知れないと思い、洗剤で体についた油を丹念に落とし、

すすぎを十分に行い、ドライヤーで乾かしてやると、きれいな羽毛になりました。しかし水に浮くためには、鳥自身が羽づくろいをしなければなりません。今のと

ころ、かなり回復してきましたが、水に入ると羽毛が水を吸い、体半分程沈んでしまいます。ゆっくり時間をかけてリハビリし、完治したら海に戻してやるつもりです。  
(阿部)



## 催し物

### 「おいらの年だよ、 たつのおとしご大集合!!」

「おいらの年だよ、たつのおとしご大集合!!」と題して、今年のえと辰（龍、竜）に関係のあるタツノオトシゴの仲間5種20点を、元旦から1月17日まで、正面入口に特別展示しました。

タツノオトシゴは知名度が高いわりには、実際に本物を見るのが初めて、というお客様が多い様子で、「案外小さいんだね、顔が竜に似ているよ。いやどちらかといえば馬だよ」というほのぼのとした親子の会話風景が見られました。その年のえ

とにちなんだ生物、その年だけ人間様にちやほやされるようですが、タツノオトシゴに関してはこれからも水族館の人気者として頑張ってもらわなければなりません。

毎年えとにちなんだ生物を展示していく予定ですが、なにせ陸上動物が多くどのようにこじつけて展示をするか、今から頭を悩ませています。（太田 守信）



### 「水族館オリエンテーリング」開催

「水槽の中にある一番大きなウミガメの体重は何キログラムあるのかな?」、「ピラニアのすんでいる川の名前は?」。こんな楽しい問題を集めて、春休みに来館した子供たちを対象に、「魚のクイズオリエンテーリング」を開催しました。

問題数は全部で30問。正解した数によりヌイグルミなどのおもしろグッズをプレゼントしました。ほとんどの問題は、水槽の中の生き物をよく観察したり、解説を読めば答えがわかるような問題ばかりでしたが、残念ながら全問正解は参加者のわ

ずか5%でした。我々の考えていた以上に、入館者の方々が解説を読んでいないという実態が判明し、みんなにもっと読んでもらえるような読みやすい解説の必要性を感じました。

それでも、問題と一生懸命に取り組んで問題用紙を片手に館内を走り回っている子供たちの姿は生き生きとしていました。（神）



### 特別展「海の宝石……貝」

このたび当館では、青森市在住の三輪薫（前県立中央病院事務局長）、道子御夫妻が、これまで二十数年かかって熱心に収集された1,500種1万点にも及ぶ膨大な数の貝のコレクションの寄贈を受けました。これを機会にゴールデンウィークから夏休みにかけて、「海の宝石……貝」と銘うってそのコレクションの一部を公開しました。

主な展示品としましては、燃え上がる炎のような色彩のアダンソンオキナエビスガイをはじめ、60kgもある大きなオオシャコガイ、そして陶磁器のようなタカラガイの仲間など約800種1,200点の

さまざまな貝を展示しております。

動きのない貝殻だけの展示のため、はたして来館者の方々に興味を持っていただけるかどうか不安もありましたが、貝たちのもつ造形美の妙とその色彩のすばらしさが、じゅうぶんに皆様を魅了したようです。（神）



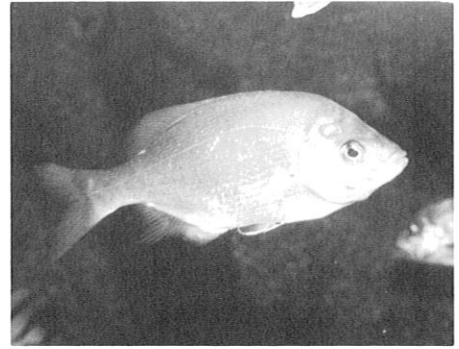
## ～ 浅虫の海の生物たち～

### (8) ウミタナゴ *Ditrema temmincki*

ウミタナゴは全長25cmあまりになり、日本各地の沿岸で普通に見られる魚です。食べてもおいしい魚で、釣魚としても大変人気があります。タナゴという名から、淡水にすむタナゴ類の仲間と思われるかもしれませんが、まったく違う仲間です。浅虫付近ではウミタナゴの他に、オキタナゴという種類も多く見られますが、こちらの方はウミタナゴに比べ体はややスマートで、体色も褐色をしているので見分けるのは簡単です。

冬の間、その姿を見ることのできなかつたウミタナゴも、5～6月頃になると沿岸の藻場に、出産のために集まってきます。出産？産卵じゃないの？と思われる方も多いと思いますが、実はウミタナゴは子供を産む<sup>たいせい</sup>胎生魚、という魚なのです。胎生魚とは卵ではなく子供を産む魚のことです。雄と雌が交尾し、卵は雌の体内で受精しやがてふ化しますが、仔魚はそのまま親の体内である程度

まで成長し、産み出されます。ウミタナゴの交尾期は秋の9～10月頃です。雄の<sup>しりび</sup>臀鰭は交尾するために長く発達しています。雄はすでに9月頃に成熟していますが、雌の方はまだ未熟で、交尾された精子はいったん雌の体内で休眠状態になります。やがて雌が成熟すると受精がおこなわれ、卵は輸卵管の内で発生を続け、ふ化し成長していきます。そして翌年の初夏に親と同じ姿で産み出されるのです。子供達は親と同じように藻場にすみつき、夏の間盛んに餌をとり成長します。やがて秋も深まり初冬の気配がする頃になると、いつの間にかウミタナゴの姿を見なくなります。(杉本)



### 浅虫水族館日誌抄録

- |  |  |
|--|--|
| <p>11. 1 「水産祭り」開催（～11月3日）<br/>         〃 第2回「図画展」開催（～11月30日）<br/>         5 十和田湖水族館よりヒメマス他搬入<br/>         8 南知多ビーチランドへゴマフアザラシ2頭搬出<br/>         23 白糠よりスルメイカ他搬入</p> <p>12. 1 琵琶湖文化館よりタナゴ類搬入<br/>         6 下田海中水族館木村副支配人来館<br/>         12 A T V タツノオトシゴ取材<br/>         14 内水試よりイトウ搬入<br/>         15 南知多ビーチランドへゴマフアザラシ1頭搬出<br/>         22 N H K ・けんみん広報タツノオトシゴ取材<br/>         23 油壺マリンパークへイトウ搬出<br/>         29 江の島水族館へホタテ・ヒトデ類他搬入</p> <p>78. 1. 1 「おいらの年だよ」タツノオトシゴ大集合」開催（～1月17日）<br/>         3 N H K タツノオトシゴ取材<br/>         9 F M 青森タツノオトシゴ収録<br/>         13 久栗坂定置網にてマダラ他採集<br/>         14 R A B 「朝のホットスタジオ」タツノオトシゴ取材<br/>         15 大畑よりゴマフアザラシ保護搬入<br/>         18 A T V 「ホームミラー」タツノオトシゴについて出演（太田）<br/>         21 A T V イルカ定期検査取材<br/>         26 大畑よりゴマフアザラシ保護搬入<br/>         〃 N H K 「ウォッチング」スルメイカ放映</p> <p>27～28 日動水海獣部会（南知多ビーチランド）「ウトウの飼育例について」（阿部）・「青森県近海のイルカ類について」発表（金沢）</p> <p>2. 6 東奥日報アシカの調教について取材<br/>         F M 青森 「釣り情報」ワカサギ・チカについて生放送</p> <p>10 江の島水族館へマボヤ搬出</p> | <p>15 油壺マリンパークよりタカアシガニ・トラギス他搬入<br/>         22 須磨水族園へマボヤ搬出</p> <p>3. 5 F M 青森 「釣り情報」ヤマメ・イワナについて生放送<br/>         9 N H K イルカショー取材<br/>         12 T B S テレパック 「駅前図鑑」取材<br/>         16 井の頭自然文化園へイトウ搬出<br/>         17 東映テレビ 「土曜ワイド劇場」ロケ<br/>         19 R A B ラジオ取材<br/>         20 「魚のクイズオリエンテーリング」開催（～4月7日まで）<br/>         21 A T V 「魚のクイズオリエンテーリング」取材<br/>         24 サンシャイン国際水族館へクロウイ他搬出<br/>         26 尾駮沼にてニシン採集<br/>         29 北大白尻実験所よりサケビクニン・スケトウダラ他搬入<br/>         30 奥戸よりババガレイ搬入</p> <p>4. 1 良原泰庸館長県へ復帰、平川和良新館長就任<br/>         6 R A B イルカトレーニング取材<br/>         7 毎日新聞取材<br/>         17 碧南海浜水族館・南知多ビーチランドよりクエ・ウツボ類他搬入<br/>         18 碧南海浜水族館・南知多ビーチランドへイトウ・マダラ他搬出<br/>         21 平館よりケムシカジカ他搬入<br/>         23 F M 青森 「釣り情報」生放送<br/>         ミンクジラ骨格到着（26日骨格標本作成の為埋める）<br/>         25 土屋よりウトウ1羽保護搬入<br/>         28 シードラゴン3尾購入<br/>         29 特別展「貝展」開催、N H K シードラゴン取材<br/>         30 R A B シードラゴン取材</p> |
|--|--|

※クイズの正解  
 ソウの親子2、イヌの親子5、空飛ぶ小鳥3、ネコの親子2、  
 ゴリラ、ヒツジ、キツネ、ワニ、ヘビ、ハクチョウ 計18匹 10種類

動物紳士録



ゴマフアザラシ

*Phoca largha*

太平洋及び大西洋の北部沿岸域に広く分布しており、我国でも本州北部～北海道沿岸で発見されます。体に黒い斑点が多数有り、ゴマフの名の由来になっています。成長すると体長は1.5m～2.0m、体重は雄150kg、雌200kg位になります。

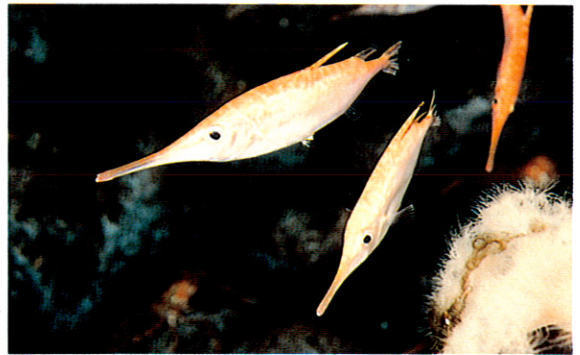
当館ではイカナゴを餌として与えていますが、とても食欲旺盛で自分の餌が無くなると、他の個体のものを取ったり、同室のペンギン達の餌を横取りするものもあります。でも時々怒ったペンギンに突つかれることもあります。

日中は写真のようにプール内で、温泉にでもつかっているかのような姿勢でいる事があります。

サギフエ

*Macrorhamphosus scolopax*

名前を聞いただけではどんな魚なのかピンときません。名前も変わっていれば姿、形も変わっています。スポイトのような長い口をいつも下に向けて、逆立ちした状態で泳いでいます。餌の冷凍アミを与えると、この長いスポイト状の口で勢いよく吸い込み、その時にはパチン、パチンという音が聞こえるほどです。本州中部以南の水深100～200mと比較的深い海の砂泥底に生息しています。



オニテッポウエビ

*Alpheus distinguendus*

採集などで海に潜っていると色々な音が聞こえてきます。中でもよく聞こえるのが「パチパチッ」という泡のはじける様な音です。これはテッポウエビという小エビが出す威嚇音なのです。この仲間はハゼ類と共生することで知られ、砂地でハゼ類を探すとその近くで一瞬懸命に単穴を掘っている光景を見ることができます。



表紙説明 カマイルカのジャンプ

白と黒のツートンカラーが美しく、その華麗な姿を早く皆様にご覧いただこうとトレーニングプールで特訓中!!

5月～8月に津軽海峡ではカマイルカの数百頭の群れが見られることがあります。

マリンスノー No.8

1988年7月20日発行

編集兼発行人

(財)青森県企業公社

青森県営浅虫水族館

〒039-34 青森市浅虫字馬場山1の25  
TEL 0177-52-3377